

東京基督教大学における
「異文化理解」の学びに関する教育効果の検証
日韓関係のケース・スタディーを通して

徐 有珍

キリストと世界 28 号抜刷 2018.3.1

東京基督教大学における 「異文化理解」の学びに関する教育効果の検証

日韓関係のケース・スタディーを通して

徐 有珍

(東京基督教大学助教)

1 研究の背景と目的

東京基督教大学（以降「TCU」と記述）の「理念とミッション」の中には「異文化・他者理解」という項目があり、そこには以下の様な文言が記されている。「文化、国籍、性、年齢などの違いがもたらす『隔ての壁』を打ち壊すキリストの福音（神学）を 味わい、和解と一致を体験するために、外国語習得に力を注ぎ、多様な国際交流プログラムを実施して、異文化・他者理解を深める」¹。TCU には、1990 年の建学の時より「国際」という名称を冠した学科が設置されていることに加え、キリスト教の精神に基づく「異文化」の理解の強調が大学全体の教育の根幹のひとつと位置付けられている。また「理念とミッション」に語られている異文化とは、日本とは異なる「異国の文化」のみを指すものではなく、性別や年齢等によってもたらされる「自国の文化」の中に存在する相違も、異文化の枠組みの中に含まれている。TCU の国際キリスト教福祉学科・国際キリスト教学専攻の専攻長、岩田三枝子准教授は、新約聖書のルカによる福音書 10 章に記された「マルタとマリヤ」の物語を通し、以下のように述べている。

当時の文化において女性の役割である「給仕」に最善を尽くそうとしたマルタは、文化の枠組みの中においてイエスに仕えました。一方、当時の文化においては男性の役割である「教えを学んだ」マリヤは、文化の枠組みを超えてイエスに仕えました。この姉妹たちは、国際キリスト教学専攻が目指す方向を示しているかのようです。²

1 東京基督教大学公式ウェブサイト「理念」(<http://www.tci.ac.jp/info/statement#mission>)

2 同ウェブサイト「国際キリスト教学専攻」(http://www.tci.ac.jp/theology_department/icstop)

岩田氏は、ひとつの文化の中における女性と男性の役割の違いを理解することや、時にはその文化的役割の殻を打ち破り、新しい文化を形成することも、TCU における「異文化理解」という学びの大切な要素であるとしている。

TCU は、この「異文化理解」という教育目標を達成するために、複数の教育的アプローチを用いている。第一に挙げられるのは、上記された「国際キリスト教学専攻」の存在と、その専攻を通して実施されているクラス学習である。「異文化理解」に直接的に関わるクラスとして提供されているのは、「異文化理解入門」「国際キリスト教学入門」「国際関係論」「キリスト教と開発」「国際社会と日本」「地域文化論」等である。TCU の全学生がこれらのクラスをすべて履修するというわけではないが、これらのクラスの背景にある教育の方向性や価値観は、TCU の全教員によって共有されるものであると言えるだろう。さらに TCU の異文化・他者理解に関する「理念とミッション」の中には、「外国語習得に力を注ぎ」という文言もあるが、現在 TCU では、日本人、アメリカ人、ウガンダ人教員による英語教育、および韓国人教員による韓国語教育が実施されている。

第二の教育的アプローチは、「異文化理解」を深めるための教育環境である。TCU のホームページ上の「国際的なキャンパスライフ」と題された文章には、以下のような説明がある。「TCU は、4 人に 1 人が留学生です。留学生の国籍もさまざま、アフリカ、アジア、北米、南米など世界中から学生が集まっています。共に寮で生活し、学ぶことで視野が広がり、文化や言語を超えた交わりを経験できます」³。留学生の出身国には、アメリカ合衆国、インド、ウガンダ、カメルーン、韓国、ケニア、ジンバブエ、中華人民共和国、ドイツ、フィリピン、ペルー、マレーシア、ミャンマーといった国名が列挙されている。また外国籍の教員も多く、専任教員の約 2 割を占める。TCU には、キャンパスに居ながらにして、多くの外国籍の学生と交わり、また多様な文化を経験することができるという教育環境が準備されている。

第三は、「異文化理解」を深めるための実践的な取り組みである。TCU では、「多様な国際交流プログラム」として、海外研修や異文化実習、短期留学等を用いた異文化体験の機会も併せて提供されている。渡航先としては、オーストラリア、タイ、フィリピン、韓国等が挙げられる。さらに日本国際飢餓対策機構、ワールドビジョ

3 東京基督教大学ウェブサイト「国際プログラム」(<http://www.tci.ac.jp/international/hakenworker>)

ンジャパン、日本ウイクリフ聖書翻訳協会、Operation Mobilization Japan といった NGO 等の海外での働きに学生を送る教育活動も行なっている。また既述されたように、多様な文化背景を持つ学生同士が寝食を共にする寮教育は、TCU において重要視されている実践的な教育の取り組みである。それは 1990 年の開学以前より、複数の前身校から引き継ぐ伝統であり、現在も在学生の 9 割以上が寮生である。この実践的な神学教育の一環としての寮教育の説明として、以下の文章がホームページに掲載されている。「朝に祈り、ともに食事をし、ときにはぶつかり、和解し、一生の友と出会い、新たな自分に出会うところです。また、多くの留学生とも一緒に生活をし、国籍、文化、言語の違いを越えて神の家族の交わりを体験するところです」。

本研究は、TCU において重要視され、主に上記の三つの教育的取り組みを用いてなされている異文化理解教育の現状を理解し、その教育効果を検証するために計画されたものである。具体的には、隣国である韓国との関係性の理解をケース・スタディーとして用い、TCU の現役の学生（学部生、院生も含め、以降「TCU 生」と記述）が、その関係性をどのように受け止め、また関係改善のために果たすことのできる役割等についてどのように考えているか、また彼らが受けている教育や、置かれている教育環境が、彼らの異文化理解に対する態度にどのような変化をもたらしているかといった問いかけに対する答えを、量的、および質的な研究方法を用いて調査・分析し、その結果に基づく提言を行うものである。

2 研究の方法

本研究では、量的研究の方法と質的研究の方法の双方が用いられる。量的調査と質的調査を統合し、ひとつの研究の中で同時に取り扱うことは、混合研究法と呼ばれており、より深い研究対象者理解のため、有益であるとされている⁴。量的研究のためには、アンケート調査が用いられ、それは 2017 年 6 月に実施された。対象となったのは、大学院生も含めた全学生で、アンケートは 60 人から回収された。60 人の内訳は、国際キリスト教学専攻の学部生 14 人、福祉学専攻の学部生 5 人、神学科の学部生 36 人、院生 5 人であった。調査は数名の教員から協力を得て、いくつかのクラスの中で実施された。またそれらのクラスを履修していない学生に対し

4 J・W・クレスウェル『人間科学のための混合研究法—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』（監修、翻訳）大谷順子、北大路書房、2010 年

では、メールボックスに研究協力の依頼の手紙とともに投函し、後日、研究者のメールボックスを通して回収された。アンケート質問の内容と、回答の選択肢は以下の通りである。

(1) 現在の日韓関係は、良好な状態にあると思いますか？

- ①とてもそう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④全くそう思わない、
⑤よく分からない

(2) 現在の日韓関係において良好であると思う分野：良好ではないと思う分野はそれぞれ何ですか？（複選択可）

良好な分野：①政治、②経済、③軍事、④文化、⑤宗教（キリスト教）、⑥その他（自由筆記）、⑦よく分からない／良好ではない分野：①政治、②経済、③軍事、④文化、⑤宗教（キリスト教）、⑥その他（自由筆記）、⑦よく分からない

(3) 日韓関係は、あなた個人にとって、重要な関係性ですか？

- ①とてもそう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④全くそう思わない、
⑤よく分からない、その理由は何ですか。（自由筆記）

(4) 日韓関係に関する情報を、主にどこから得ていますか？（複数回答可）

- ①人を通して、②新聞・雑誌、③TVニュース、④TVバラエティー、⑤インターネット（サイト名：自由筆記）

(5) TCUの「国際的な教育環境」（外国人留学生の存在等）は、あなたの日韓関係に関する思いや考え方に影響を与えていますか？

- ①とてもそう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④全くそう思わない、
⑤どちらとも言えない

(6) TCUの「異文化理解」や「国際関係」に関連する授業は、あなたの日韓関係に関する思いや考え方に影響を与えていますか？

- ①とてもそう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④全くそう思わない、
⑤履修したことがない

(7) TCUの「チャペル礼拝」や「祈祷会」等は、あなたの日韓関係に関する思いや考え方に影響を与えていますか？

- ①とてもそう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④全くそう思わない、
⑤どちらとも言えない

(8) あなたはTCUでの「異文化交流」に、主体的に、また積極的に関わっていますか？

- ①とてもそう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④全くそう思わない、
⑤関わり方がよくわからない

(9) より良い日韓関係のために、自分自身（あなた個人）にもできることがあると思いますか？

- ①とてもそう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④全くそう思わない、
⑤そもそもあまり興味が無い、①または②に○を付けた方にお聞きます。それは例えばどのようなことですか。（自由筆記）

(10) より良い日韓関係のために、今後 TCU がさらに充実させるべき「取り組み」は何ですか？（複数回答可）

- ①教育環境の充実、②異文化交流の機会、③クラス学習の機会、④チャペル礼拝等の機会、⑤特に思い浮かばない、⑥その他（自由筆記）

アンケート調査は以下の順番で意図的に展開されている。質問1から質問4は、日韓関係に関する個々の学生の認識の確認である。質問5から質問7は、TCUの教育内容や教育環境が、個々の学生に与える影響に関する調査をしたもの。そして質問8から質問10は、個々の学生の実践的取り組みに関する調査である。アンケートから得られた結果は、数値化され、その上で分析された。なお、本論文にとって重要性が高いと思われる回答（質問⑤-⑨の回答）に関しては、その結果を第4章（アンケート調査の分析）においてグラフ化して記載した。

また本研究では、アンケート調査を用いた量的調査と並行させ、インタビューを用いた質的調査も実施された。質的研究におけるデータ収集、およびデータ分析は、マイケル・クイン・パットンの著書に記述されたグラウンデッドセオリーのガイドラインに沿って実施された⁵。インタビュー調査は、アンケート調査が実施された翌月の、2017年7月に実施された。対象者は、アンケート調査に参加した学生で、インタビューに協力が可能な学生の中からランダムに選択された。なお、インタビュー時間は、ひとり40-60分程度で、アンケート調査の中の質問をさらに掘り下げる形（個々のアンケート回答の背景や理由を尋ね、確認する質問を用いた方法）で実施された。

5 Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, Thousand Oaks: Sage Publications, 2002.

3 アンケート調査の結果

アンケート質問①の結果

「現在の日韓関係は、良好な状態にあると思いますか?」という質問に対して、以下のような回答があった。〈①とてもそう思う：0人、②ややそう思う：13人、③あまりそう思わない：32人、④全くそう思わない：7人、⑤よく分からない：8人〉

「とてもそう思う」という回答が0であった反面、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」という回答者の合計は39人で、全体の65%を占めた。学生は全体的に「日韓関係は良好ではない」という認識を持っていることが伺えた。

アンケート質問②の結果

「現在の日韓関係において良好であると思う分野は何ですか?」という質問に対して、以下のような回答があった。(複数選択可) 〈①政治：0人、②経済6人、③軍事0人、④文化45人、⑤宗教(キリスト教)38人、⑥その他(自由筆記内容：食べ物、韓流ドラマ、芸能等メディアの流通、K-Pop、かつての映画ブーム、TV、アイドル、教育)、⑦よく分からない：7人〉

「文化」と答えた学生は全体の75%、「宗教(キリスト教)」は全体の63%であった。⑥その他と回答した学生が記した自由筆記の内容には、一般的には「文化」の範疇に含まれるであろう回答も多く見られた。

一方、「現在の日韓関係において良好ではないと思う分野は何ですか?」という質問に対しては、以下のような回答があった。(複数選択可) 〈①政治：53人、②経済10人、③軍事23人、④文化5人、⑤宗教(キリスト教)1人、⑥その他(自由筆記内容：歴史[5人]、スポーツ[2人])、⑦よく分からない：5人〉

双方の質問を通して、日韓の関係における政府間関係と民間関係の間にある大きな隔たりを強く感じているTCU生の思いが浮き彫りとなった。

アンケート質問③の結果

「日韓関係は、あなた個人にとって、重要な関係性ですか?」という質問に対して、以下のような回答があった。〈①とてもそう思う：21人、②ややそう思う：30人、③あまりそう思わない：9人、④全くそう思わない：0人、⑤よく分からない：0人〉

「とてもそう思う」「ややそう思う」という回答者の合計は51人で、それは全体の85%となる。また、「その理由は何ですか」という自由筆記質問に対する回答に

は、家族や友人関係の存在や、所属する教会を通じた関係性、また隣国という地理上の関係性や歴史的・政治的つながり等がその理由として挙げられた。一方、重要な関係性であるとは思わない理由としては、個人的なつながりの欠如を挙げる回答が多く見られた。日韓関係の重要性を肯定する85%の学生から寄せられた筆記回答の一部を以下に列挙する。

「自分に韓国の背景があるから」「母親が韓国人であるから」「韓国人の知人がいて、韓国が好きだから」「韓国人の友人がいて、とても大事な存在だから」「韓国人の牧師先生や韓国から来ている人を知っているから」「TCUに韓国人の友人がいるから」「宣教協力という面で重要なパートナーだと思うから」「韓国人クリスチャンとは将来関わっていくと思うから」「韓国でのキリスト教の広まりに関心があるため」「宣教協力という面で重要なパートナーだと思うから」「隣国であり、自由と民主主義という価値観を共有しているから」「個人的にK-POPや韓国の食文化が好きなので」「アジアという点と歴史という点が関わっているから」「日韓に限らず、どの国とも良い関係を持つべきだと思う」「地理的に近く、様々な面で影響し合っていると感じるため」「国の距離が近く、多くの交流があるから」。

アンケート質問④の結果

「日韓関係に関する情報を、主にどこから得ていますか？」という質問に対して、以下のような回答があった。(複数回答可)〈①人を通して：36人、②新聞・雑誌：20人、③TVニュース：37人、④TVバラエティー：7人、⑤インターネット：28人〉

自由筆記のインターネット・サイト名に関しては、Yahoo ニュース、Line ニュース、YouTube、Twitter、Smart ニュース、NHK、BBC、ロイターニュース等が挙げられた。最も頻繁に挙げられたのは、Yahoo ニュースで、11人であった。学生は友人や知人を含め、比較的多様なソースから韓国に関する情報を得ていることがわかった。

アンケート質問⑤の結果

「TCUの『国際的な教育環境』(外国人留学生の存在等)は、あなたの日韓関係に関する思いや考え方に影響を与えていますか？」という質問に対して、以下のような回答があった。〈①とてもそう思う：19人、②ややそう思う：30人、③あまりそう思わない：6人、④全くそう思わない：3人、⑤どちらとも言えない：2人〉
「とてもそう思う」「ややそう思う」という回答を足すと全体の8割以上となり、

TCU の教育環境の影響の大きさが伺える結果となった。

アンケート質問⑥の結果

「TCU の『異文化理解』や『国際関係』に関連する授業は、あなたの日韓関係に関する思いや考え方に影響を与えていますか?」という質問に対する回答は、以下のようであった。〈①とてもそう思う：15 人、②ややそう思う：22 人、③あまりそう思わない：9 人、④全くそう思わない：1 人、⑤履修したことがない：13 人〉

60 人中 13 人は履修経験がなかった。履修経験のある 47 人の学生からの回答のみを考慮すると、「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた回答者は 37 人で、アンケート質問⑤の結果同様、全体の約 8 割となった。

アンケート質問⑦の結果

「TCU の『チャペル礼拝』や『祈祷会』等は、あなたの日韓関係に関する思いや考え方に影響を与えていますか?」という質問に対して、以下のような回答があった。〈①とてもそう思う：12 人、②ややそう思う：19 人、③あまりそう思わない：19 人、④全くそう思わない：6 人、⑤どちらとも言えない：4 人〉

この質問に対する「あまりそう思わない」「全くそう思わない」という回答の合計は、全体の約 4 割以上となり、「チャペル礼拝や祈祷会」は、「国際的な教育環境」や「異文化理解や国際関係に関連する授業」比べると、そのインパクトは小さいことがわかった。

アンケート質問⑧の結果

「あなたは TCU での『異文化交流』に、主体的に、また積極的に関わっていますか?」という質問の回答は、以下のようであった。〈①とてもそう思う：9 人、②ややそう思う：27 人、③あまりそう思わない：17 人、④全くそう思わない：2 人、⑤関わり方がよくわからない：5 人〉

TCU 生の約 6 割は、主体的で積極的に関わっているという自己評価をしている。一方で、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」「関わり方がよくわからない」という回答者の合計は 24 人で、それは全体の約 4 割であった。

アンケート質問⑨の結果

「より良い日韓関係のために、自分自身（あなた個人）にもできることがあると

思いますか。」という質問に対する回答は、以下のようであった。〈①とてもそう思う：14人、②ややそう思う：31人、③あまりそう思わない：15人、④全くそう思わない：0人、⑤そもそもあまり興味がない：0人〉

「とてもそう思う」「ややそう思う」の合計は45人で、全体の75%となった。また、そう回答した学生を対象に、「それは例えばどのようなことですか」という自由筆記質問を実施した。そこには、韓国人との個人的な関係性を醸成することや、相互理解を深めること、また歴史を学ぶこと、韓国語を学ぶこと、共に祈ること、といった記述が見られた。回答の一部を以下に列挙する。

「日本にいる韓国人の方と交わりをもつこと、話しを聞くこと」「韓国人の方と関わり、韓国に対する知識を深める」「両国の立場や意見に関する正確な情報を知る」「積極的に関わり、互いの文化を理解し、深める」「韓国人と友だちになり、情報を調べてメディアに流されない」「韓国人の友人との個人的レベルで交わりやディスカッションや、チームでお互いに mission trip などを通して交わる機会をもつ」「もっと日韓関係のニュースを調べる」「TCUで韓国の留学生から韓国に関する話を聞く」「韓国から来られた方と共に学習し、一緒に食事をする。御言葉を学ぶ」「韓国から宣教師として来ている牧師と多く交わり、良い関係を築いていく」「韓国人留学生と個人的な信頼関係を築くこと」「日韓で共に歴史、社会問題を学び、ツアーを実施して訪れ合うなど」「日韓の歴史を知り、理解を深める」「韓国語が話せるようになる」「お互いの否を認めてゆるし合い、祈ることができると思う」「祈祷会で共に祈る機会を多くもつ」。

アンケート質問⑩の結果

「より良い日韓関係のために、今後TCUがさらに充実させるべき「取り組み」は何ですか」という質問に対する回答は、以下のようであった。(複数回答可)〈①教育環境の充実：8人、②異文化交流の機会：42人、③クラス学習の機会：22人、④チャペル礼拝等の機会：21人、⑤特に思い浮かばない：5人〉

「その他」(自由筆記)の回答には、韓国人留学生とのより深い交流の機会を多く持つといった回答が見られた。回答の一部を以下に列挙する。

「韓国人学生と共にフリータイムで現状を知るワークを実施する」「韓国人学生とオープンに学び、意見を言える機会を持つ」「韓国料理、K-POPの紹介など、興味のあるものと一緒にする」「年に1回でも韓国人留学生のチャペルがあっても良いのではないと思う」「日韓の歴史に関する、日本人学生と韓国人留学生が一緒に

受けられる授業を持つ」。

4 アンケート調査の分析

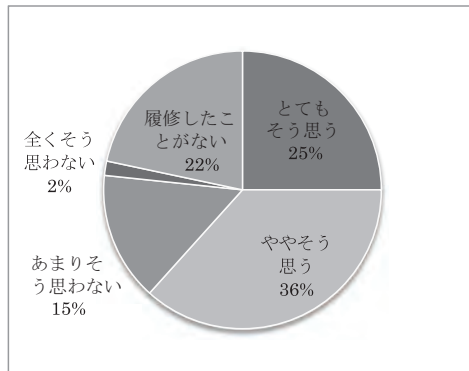
アンケート質問の①から④は、日韓関係に関する個々の学生の認識の確認である。2017年7月に、特定非営利活動法人「言論NPO・東アジア研究院」によって実施された、第5回日韓共同世論調査：日韓世論比較結果では、「現在の日韓関係をどう思うか」という日本での質問に対し、「どちらかといえば悪い」「非常に悪い」という回答が57.7%であったと発表された⁶。TCU生への調査では、「現在の日韓関係は良好だと思いますか」という質問に対し、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」という回答者の合計は39人で、これは全体の65%である。質問の文言は多少異なるが、TCU生の持つ日韓関係に対する感想と、一般的な日本人の持つ日韓関係に関する感想には、大きな隔たりは無いことが伺える。ちなみに、韓国で実施された同調査では、「現在の日韓関係をどう思うか」という質問に対し、「どちらかといえば悪い」「非常に悪い」という回答が全体の65.6%であったと報告されている⁷。また同世論調査では、「日韓関係は現在重要か」という質問に対して、「重要である」「どちらかといえば重要である」という回答が日本での調査全体の64.3%であったと発表された。TCU生への調査では、「日韓関係は、あなた個人にとって、重要な関係性ですか?」という質問に対し、「とてもそう思う」「ややそう思う」という回答は全体の85%であった。上記の質問同様、質問の文言は異なり、単純な比較はできないが、これは一般的な日本人の回答より約2割高い数字である。また

6 日本側の世論調査は、日本の18歳以上の男女を対象に6月17日から7月2日まで訪問留置回収法により実施された。有効回収標本数は1000である。回答者の性別は、男性が48.6%、女性が51.4%。最終学歴は小中学校卒が8.3%、高校卒が46.5%、短大・高专卒が19.1%、大学卒が22.2%、大学院卒が1.8%、その他が0.7%。年齢は20歳未満が2.3%、20歳から29歳が12.1%、30歳から39歳が14.8%、40歳から49歳が17.3%、50歳から59歳が14.5%、60歳以上が39%となっている。

7 韓国側の世論調査は、韓国の19歳以上の男女を対象に6月11日から6月29日まで調査員による対面式聴取法により実施された。有効回収標本数は1003である。回答者の性別は、男性が49.8%、女性が50.2%。最終学歴は小学校卒が7.3%、中学校卒が7.5%、高校卒が37.6%、大学在学・中退（短大を含む）が13.6%、大学卒が32.2%、大学院以上が1.9%。年齢は19歳から29歳が17.6%、30歳から39歳が17.4%、40歳から49歳が20.5%、50歳から59歳が19.8%、60歳以上が24.5%となっている。

TCU 生を対象とした調査では、その理由に対する筆記式の回答を求めたが、既述されたように、家族や友人関係の存在や、教会を通じた関係性などが多く挙げられた。TCU において、また学生が通う教会において直に接する韓国人の多さが、この結果をもたらしているのかもしれない。ちなみに韓国人を対象に実施された「言論 NPO・東アジア研究院」による調査では、「日韓関係は現在重要か」という質問に対し、「重要である」「どちらかといえば重要である」という回答が全体の 89.9%であったと発表されている。

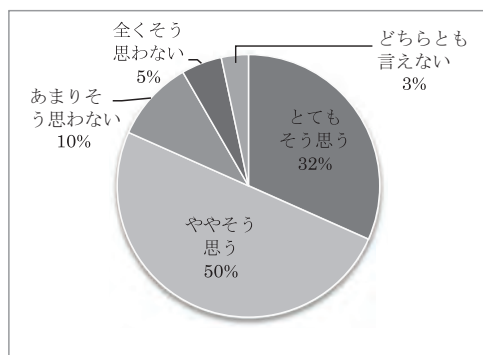
アンケート質問の⑤と⑥は、TCU の教育内容や教育環境が、個々の学生に与える影響に関する調査をしたものである。なお、アンケート調査の分析を解説する上で可視化されたデータを用いることは有効と思われるので、質問⑤から質問⑨に関してはその結果を、円グラフを用いて図表化した。



質問⑥ TCU の「異文化理解」や「国際関係」に関連する授業は、
あなたの日韓関係に関する思いや考え方に影響を与えていますか？

クラス学習に関する質問⑥では、「異文化理解」や「国際関係」に関連する授業を履修した TCU 生（上記の図表より、「履修したことがない」と回答した 22%の学生を差し引いた、残りの学生の中の割合）の約 8 割が、授業が個々の日韓関係に関する思いに与えるインパクトを評価しているという結果が出た。TCU での「異文化理解」や「国際関係」に関連する授業の中で、日韓関係に関して直接的に割かれる時間の割合は決して大きくはない。しかしそれらのクラスにおいてなされる直接的、間接的な言及や、学生による応用的な考察を通して、ここで「8 割」という

結果が出たことは、教育効果を図る上で特筆すべきものであろうと思われる。

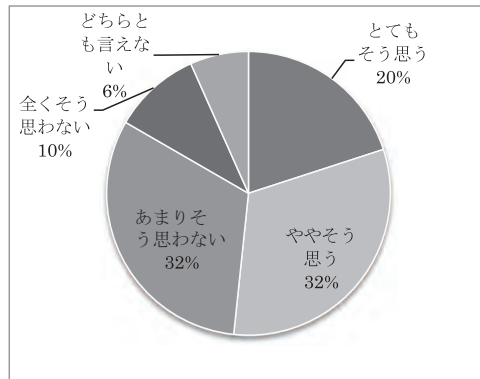


質問⑤ TCUの「国際的な教育環境」(外国人留学生の存在等)は、あなたの日韓関係に関する思いや考え方に影響を与えていますか？

質問⑤では、TCUの「国際的な教育環境」が個々の日韓関係に関する思いや考え方に与えるインパクトを評価する回答が、クラス学習同様、約8割となった。TCUにおける「国際的な教育環境」は、単にクラスで外国人と机を並べるだけには留まらない、寮生活等を通して寝食を共にするというレベルでの接触や協働を指しており、この「8割」という数字の背後には、そのような教育環境が含まれている。TCUにおける異文化理解のための「国際的な教育環境」では、必ずしも韓国人学生や韓国文化との接触がその中心的位置を占めているというわけではないが、クラス学習同様、個々の学生の応用的な理解を通して、ここで「8割」という数字が現れたことは、質問⑥の回答同様、特記に値すると思われる。

アンケート質問⑦も、質問⑤、質問⑥と同様、TCUにおける教育が個々の日韓関係に関する思いや考え方に与えるインパクトを評価する項目であるが、質問⑦ではその中から、TCUにおける教育の大きな特色でもある、「礼拝」と「祈祷会」という宗教的な要素を取り上げた。

「祈祷会」への出席は、学生の選択に任されているが、「礼拝」は、火曜から金曜の週4回の出席が原則義務付けられている。それらが「日韓関係」に与えるインパクトをポジティブに評価する回答は、「とてもそう思う」「ややそう思う」を足して

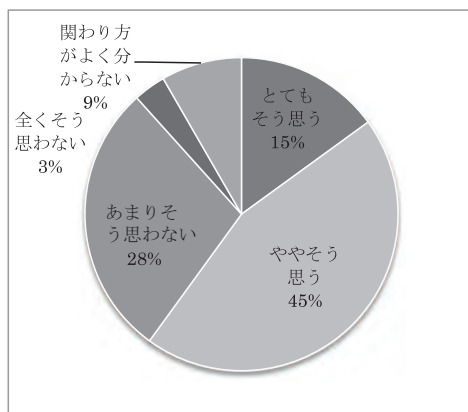


質問⑦ TCUの「チャペル礼拝」や「祈祷会」等は、
あなたの日韓関係に関する思いや考え方に影響を与えていますか？

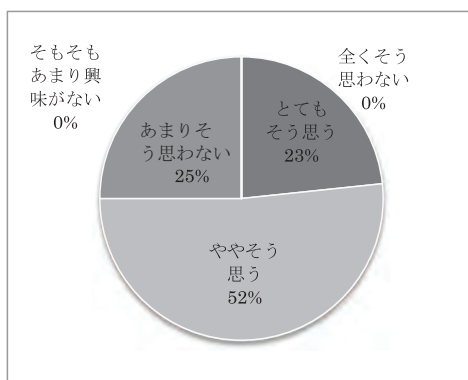
31人であり、それは全体の約5割に値する。しかし一方で、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の合計は25人で、それも全体の4割以上となる。TCUで持たれる「礼拝」や「祈祷会」において、「日韓関係」に関する直接的な言及があることは稀ではあるが、質問⑤と質問⑥の回答が8割であったことを考慮すると、質問⑦の回答の「とてもそう思う」「ややそう思う」の合計が約5割と、比較的やや低い数字であったことは、特筆に値する。TCUにおける教育の重要な部分を担う「礼拝」や「祈祷会」が、より広く学生の「異文化理解」によりインパクトを与えることができるようになることは、今後の大きな課題と言えるのではないだろうか。

質問⑧、質問⑨は、個々の学生の実践的取り組みに関する調査である。質問⑧では、個々の学生が、どれだけ主体的に、また積極的に「異文化交流」に関わっているかが尋ねられた。

質問⑧では、TCU生の約6割が、自身の関与を「主体的で積極的」と評価する一方、約4割が「そうではない」「あまりそうではない」「関わり方がよくわからない」と回答している。TCU生の多くは、そこにある国際的な教育環境の中で、学びを通して「異文化理解」に関する大きなインパクトを受けてはいる。しかしまだ積極的に、そして主体的に異文化交流に関わることができない学生も少なからずいると分析することができる。



質問⑧ あなたはTCUでの「異文化交流」に、主体的に、また積極的に関わっていますか？



質問⑨ より良い日韓関係のために、自分自身（あなた個人）にもできることがあると思いますか？

質問⑨では、「より良い日韓関係のために、自分自身（あなた個人）にもできることがあると思いますか」という問いに対して、TCU生の75%が、「とてもそう

思う」「ややそう思う」と回答している。質問の内容はあくまで、「できることがあると思いますか」であり、「実際に何かしていますか」ではない。質問⑧は、日韓関係という前提が外された質問となっているが、質問⑤と質問⑥の結果との比較同様、質問⑧と質問⑨の間に見られる約25%のギャップには、日韓関係の改善と、TCUにおける異文化交流を結びつけて考えることができない学生の存在や、「できることはあると思っはいても、まだ積極的に取り組めていない」という学生のジレンマが現れている数字と分析できるかもしれない。

最終質問⑩は、個々の学生の実践的取り組みにプラスとなるようなTCUによる教育的「取り組み」に関する提案を聞いたものである。クラス学習の更なる充実や、礼拝における取り組みの可能性を示唆する回答も多く見られたが、圧倒的に多かった提案は、異文化交流の機会を増やすこと（回答の約7割）であった。質問⑨に対する自由筆記回答には、より良い日韓関係のために個々にできることに関する様々な提案が記されていることは既述したが、その大半は、質問⑩と呼応し、個人的レベルでの韓国人との交流とその重要性を唱っている。

5 インタビュー調査の結果と分析

インタビュー調査は、アンケート調査終了の翌週に、3人のTCU生を対象に実施された。対象となった3名は、質的研究（パットン）のガイドラインに従い、purposeful random sampling⁸の方法を用いて選出された。3名の内訳は、国際キリスト教学専攻生2名（20代前半、学部3年生と2年生）および教会教職専攻生（20代後半、学部3年生）であった。調査の理由は、アンケート調査という量的研究の性質上、そこから明らかにならない事柄を、インタビュー調査という質的研究の方法を通して拾い上げ、より多角的に学生の声を研究に反映させるためである。インタビューの内容は、グラウンデッドセオリーの方法を通し分別・分類され、共通する中心的概念を用いてカテゴリー化された。以下にその結果を4つの項目に分けて列記する。

8 purposeful random sampling (Patton, 231-37) は、研究者の意図が大きく影響しないよう、ランダムに研究対象者が選ばれるサンプリングの方法である。具体的には、アンケート調査の対象となった学生のリストから、チャペル後の時間に出会った順番に声をかけ、その中からインタビューへの協力を承諾した初めの3名が選ばれた。

結果①：日韓関係のネガティブな部分を目撃したことがある。

「日韓関係の現状をどう思うか？」という質問者からの問いかけに対して、日韓のネガティブな関係性を象徴するような実体験や、それらを通して感じた印象等に関する言及があった。以下に実際の返答の一部を列挙する。

「幼い頃、町にあった朝鮮学校に対する差別を目撃した」「最近、韓国を批判するデモやヘイトスピーチが増えたと感じる」「中学生の時に、在日韓国人の友だちがいじめられるのを見た」「ネットの世界で、韓国に対する攻撃がある」「メディアには、韓国に対する人種差別的報道がある」「私は政治に関してはよく知らないが、ニュースを見るとなんか仲悪いと感じる」。

結果②：自分の身の回りには、日韓関係のポジティブな部分も多くある。

インタビューからは、日韓関係のポジティブな部分や、改善されてきていると感じる部分に関する、実体験に基づく言及が多く見られた。返答のボリューム（言葉の内容量）としては、ポジティブな部分に関する言及が、ネガティブな部分に関する言及を大幅に上回っていた。以下に実際の返答の一部を列挙する。

「今の日本の若い世代は、韓国人になりたいと言う人もいるほど、韓国に関する意識が上の世代と違う」「私が高校生だった時は、周りの友だちが韓国の化粧品を使ったり、韓国によく旅行で行ったり、韓国人のようなファッションやメイクをする友だちがたくさんいた」「日本と韓国とのハーフである私はよく周りから“韓国とのハーフ？羨ましいなあ”と言われながら学校に通った世代だった」「SNSを見ても日本人の友だちが自分の名前を韓国語に書いたりすることをたくさん見かける程、今の世代は変化している」「今の若い世代は、韓国人に対してとても好意的で、これからは希望があると思う」「今行っている教会では、日本のお年寄りの方々もイエーイ！という感じで、韓国人の信徒さんたちとも仲が良い」「韓国教会からミッションチームが来て、色んな活動を行うことを見て感銘を受けた」。

結果③：TCU では、「異文化理解」の観点から、韓国を学ぶ良い機会が提供されている。

TCU での教育に目を向ける質問に関して、学生のより良い「異文化理解」につながる学びの機会がそこにあることが言及され、クラス学習の内容はもとより、寮、食堂、祈祷会等での韓国人留学生との接触も、学びのための良い機会となる場所であるといった具体例が多く挙げられた。以下に実際の返答の一部を列挙する。

「国際関係に関する授業で、日本周辺の国々に関する授業を通して、異文化というものが必ずしも国際的な関係だけではなくて、他人との関係もそこに含まれることであることを学んだ」「TCUの異文化理解入門、政治学、東アジアのクラス等を通して、初めて、日韓の間でそのような歴史的な過去があったことを知った。そしてその学びを通して、もっと現在の状況を改善したいと思うようになった」「異文化に関する授業と一緒に学ぶ機会はある」「韓国人の仲間と直接に会って話を聞いて、お互いの違いをもっとよく理解するようになった」「韓国人留学生の祈祷会に出席しているが、そこには人と人との触れ合いがあって良い」「食堂や寮で、韓国人だけじゃなくて、世界いろんな国々の学生と交流する機会がある」。

結果④：TCUにおいてさらに韓国に関する「異文化理解」を深めることは可能である。

結果③では、韓国に焦点を当てた「異文化理解」の学びの良い機会が、TCUに多く存在することが語られたが、その上でさらに理解を深め、ポジティブな関係性を築くための方法がインタビューの対象者から語られた。具体的には、学生が興味を持つ内容を用いつつ、さらにディスカッションの機会を増やすことや、学内で互いに文化的に触れ合う機会を設けること。さらには韓国語のチャペルを実施したり、地域社会と連携したりして韓国文化の理解を推進すること等が挙げられた。また一方で、特に韓国人留学生に対して配慮すべきことなども合わせて挙げられた。以下に実際の返答の一部を列挙する。

「韓国について学生がもっと意識し、興味を持つことができるような機会を提供すること。たとえばK-POPみたいな分野は、今、日本で本当に人気があるので、そのようなものを用いることもできると思う」「韓国人学生と日本人学生が共にディスカッションをする機会を増やせるのであれば、互いのことをもっと理解することができるとし、授業の目的ももっと達成できると思う」「韓国人留学生と実際にどんなふうに交わればいいのか分からないこともあり、触れ合う機会が多くはないので、そのような機会が増えたらいいなあと思う」「TCUが破れ口に立つという目的を持つなら、韓国という国に対してもっと触れ合う機会、知る機会を増やすべきではないかと思う。宗教もそうであるが、やはりその国の人と触れ合うこと、その国の文化を知ることから好感を持つようになり、そこから問題解決のヒントを

得ることになると思う」⁹「地域に活動を連携することもできると思う。地域のための活動をする中で韓国人学生の証を聞く機会を持ったり、日本人学生と韓国人学生が協力して韓国文化フェスティバルを開いたりすることを通して、地域社会においても徐々に日韓関係について話せる機会が増えていくと思われる」「韓国語のチャペルがあっても良いんじゃないかと思う。韓国人の留学生たちも自分の言葉で賛美したい時があると思うので、たまにはそのような機会があっても良いんじゃないかと思う」「韓国の賛美曲もとても良いので聞ける機会をもっと持つこと」「韓国人留学生チャペルを、学校生活だけで大変な留学生たちに全部任せるのではなくて、日本人学生と協力して共に作っていったらいいと思う」「韓国人留学生たちは日本人に合わせようと無理をすることをよく見るが、お互いに歴史的な背景が異なるし、過去のこともあるので、あまり無理し過ぎないでほしいと思う」。

6 実践的提言

英国 Durham University の教育学者 Michael Byram は、1997 年の著書の中で、異文化理解教育の目標を、attitude（態度）、knowledge（知識）、skills（比較、解釈する技能）という 3 つの重要な要素を用いて説明している¹⁰。Byram によれば、よりよい異文化理解につながる attitude は、異文化に対する敬意や、自分の判断を保留することのできる姿勢、knowledge は、他国の文化だけではなく、自国の文化に関する知識を持つこと、skills は、自国と他国の文化を結ぶための具体的なアクションに至ること等を指す¹¹。本章では、アンケート調査、およびインタビュー調査の結果とその分析を基に、TCU における「異文化理解」の学びに対する実践的提言を記述する。またその目指すところは、TCU 生の日韓関係に関する理解を深めるだけでなく、Byram の提唱する、より広い意味での異文化理解教育の目標を念頭に置きつつ、TCU 生の「異文化理解」の学びを推進することである。

提言①広い意味での「自国の文化」を学ぶクラスを設置する。

9 「破れ口に立つ」とは、旧約聖書エゼキエル書 22 章 30 の言葉で、東京基督教大学のコンセプトとして用いられている文言である。

10 Michael Byram, *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence, Multilingual Matters*, 1997.

11 Ibid., 50-52.

TCUでは現在、異国の文化の学びを念頭に置いた「異文化理解」のためのクラスが設置されている。しかし自国の文化や、その中にある様々なサブグループの文化や価値観の比較文化的な学びには、あまり焦点が当てられていないのが現状である¹²。TCUの「理念とミッション:異文化・他者理解」という項目には、「文化、国籍、性、年齢などの違いがもたらす『隔ての壁』を打ち壊す」と記されており、そこにはいわゆる「異国の文化」とは異なる意味の「文化」も含まれている。本研究の対象となった学生からは、TCUにおいて共に生活圏を共有する留学生との関係性のさらなる進展や深化を強く求める意見が多く聞かれたが、そのためには、まず日本人学生が身の回りにある価値観や世界観を、そこにあるステレオタイプや先入観といった、必ずしもポジティブとは言い難い部分も含めて知ることが必要であると言えるだろう。インタビューの中では、日本語という言語に現れる文化的特色について以下のように語った学生があった。「日本人学生でありながら、日本語や日本文化特有の『あいまいさ』に、もどかしさを感じることがあります。日本人学生が、客観的に日本文化を検証する機会を持つことは必要でしょう」。日本国内に存在する人種差別の目撃例もアンケート調査を通して明らかになったが、「他国文化」の学びと並行して「自国文化」を、そのネガティブな側面も含め、より広く深く学ぶことは、さらに質の高い「異文化理解」の学びにつながるのではないだろうか。

提言②留学生の学びを多様化させ、交流の機会を増やす。

本研究のインタビュー調査では、留学生に課せられた学びへの負担が、結果的に日本人学生との交流を阻む結果につながっているという意見がいくつか聞かれた。韓国語チャペルの実施が、韓国人留学生にとって過度な重荷になってしまうのではないかという意見は、そのような危惧の一例である。大学として、質の高い学びをすべての学生に提供することは重要である。しかし、いわゆる「book-learning: 個人的学習」と「active-learning: 他者との協働を通した学び」の比重を見直すことは、より良い「異文化理解」の学びの機会を学生に提供することになるのではないだろうか。具体的には、異文化交流の一部を単位化し、同時に個人的学習の負担を軽減することを提言したい。それは決してアカデミック・スタンダードの引き下げや学びの縮減ではなく、留学生による日本人学生との文化的交わりを、大切な学びの機会として評価し、それを推進するということである。それは留学生を、図

12 TCU 岡村直樹教授の「思春期の文化と伝道」クラスでは、日本のユース文化を調査・発表する課題が出され、ユース・サブカルチャー理解の取り組みがなされている。

書館や、部屋の机の前から、異文化交流の場、相互理解の場に導き出すことにより、結果的により良い学びの機会を全学生に提供することになる教育的アプローチであると言えるだろう。また日本人学生と外国人学生との異文化交流を奨励し、同様にその一部を単位化することも検討されるべきであろう。

提言③留学生のため、日本文化の実践的理解を深める機会を持つ。

留学生の「日本理解」を深めることは、たとえば留学生が自国人に対し、日本人や日本の文化について分かち合うといった、より広い範囲での「文化的相互理解」につながる学びである。TCU は日本人学生、留学生の双方に、異文化理解のための多様な経験の機会を提供しているが、日本人学生と同様に、留学生が日本における異文化の経験と、自国の文化を比較文化的に学ぶことのできる機会も合わせて提供されるべきであろう。具体的には、たとえば教会実習（実践神学実習）や、寮生活を通して得た経験を、他の留学生と共に分かち合い、それをより深い「異文化理解」につなげる学びとすること等を挙げることができる。この提案は、まずクラスという枠組みの中で積極的に実施されるべきであり、さらにその学びの中に日本人学生が加われば、双方の「異文化理解」はさらに深まるであろう。

提言④「異文化理解」を、TCU の「教育の理念とミッション」を用いて推進する。

本論文は冒頭で、TCU の「教育の理念とミッション」の中に記された「異文化理解」に関する文言を紹介した。それは TCU における「異文化理解」が、単なる教育目標ではなく、TCU における重要な教育ミッションの目的のひとつであることを表している。学生はもちろんのこと、教員自身も、TCU における「異文化理解」教育が、重要な神学的ミッションとして位置付けられていることを繰り返し覚えることは、「異文化理解」教育が TCU においてさらに推進される上で非常に重要なことであると言えるだろう。そのためには、クラス学習もさることながら、チャペルや祈祷会といった場面においてもより強く「異文化理解」が意識されることが望ましい。

7 研究上の制約

本研究は、「異文化理解」という教育上の課題に対して、アンケート調査とインタビュー調査という量的および質的研究の方法を用いて実施されたものである。調

査の方法論等から来る研究上のいくつかの制約や課題点等について、ここで短く確認しておきたい。

① 本研究の目標は、「異文化理解」という教育的題材が、TCUにおいてどのように理解、実践されているか、またより良い「異文化理解」の学びのために今後必要な事柄は何かといった問いに対するTCU生からの回答を調査、検証するものであると冒頭に記した。本論文は、TCUにおける教育のコンテクストにおける「異文化理解」という言葉の理解と課題をTCU生から直接あぶりだすことを中心的目標に据えた、帰納的アプローチを用いた研究であり、「異文化理解」という言葉の学術的理解や定義については、あえて深く触れることを避けている。

② 本研究は、「日韓の関係」に関するケース・スタディーを用いた実証的研究であるが、そのような研究の短所として頻繁に指摘されるのは、研究結果の応用範囲に関する疑問である。「日韓の関係」は、TCU内に存在する多様な「異文化理解」の題材のひとつである。例えばTCUには、毎年米国から多数の短期留学生在が訪れるが、「日米関係」には、「日韓関係」とは大きく異なる文化的ダイナミックスが働いていることだろう。したがって本研究は、「日韓の関係」のみを用いて、TCUの異文化理解教育の「全容」を解明しようとするものではなく、あくまでもひとつの視点からの研究・調査であることをここで確認したい。

③ 本研究で実施されたアンケート調査では、学生60人から回答を得ることができた。60人の内訳が、国際キリスト教学専攻の学部生14人、福祉学専攻の学部生5人、神学科の学部生36人、院生5人であったことはすでに述べたが、対象母数に対するデータ収集の割合は、一般的なアンケート調査に関する統計学的ハードルをクリアしている¹³。また研究対象者の年齢、学科、専攻のバランスにも配慮した。一方で今回の研究では残念ながら、学科専攻別のデータの取り扱いや、質問別のクロスリファレンスを用いた分析には至らなかった。それらは今後の課題としたい。

④ インタビュー調査に関しては、質的研究の方法、具体的にはグラウンデッドセオリーが用いられており、それは「より広く」ではなく、「より深く知る」という方向性の研究である。質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式の中でその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たすためにあらゆるデータを活用するという方法論の中で、説得力をもつ実践的な取り組みの手掛

13 アンケート調査を用いた本研究の量的研究の部分は、要求精度が10%、信頼率が95%となっている。

かりとして活用されるべきものであろう¹⁴。

⑤ 本研究の研究者自身の人種文化的背景が研究のデータ収集に与えた影響についてもここで言及する必要があると思われる。本研究の研究者は韓国人教員であり、アンケート調査の冒頭でそれは明らかにされている。またインタビュー調査においては、韓国人教員を目の前にして、自身の韓国に対する思いを語るという場面に、学生は置かれている。そこには、ある種の「遠慮」や「忖度」といった感情や判断が働いたのではないかと容易に推測することができる。もちろん、同じ研究が人種的背景の違う者によって実施された場合、どのような結果が出たかについて推測することは困難であるが、本研究にはそのような研究上の特色があることも、ここに確認事項として付記したい。

8 最後に……

本研究では、学生対象にアンケート調査を実施したが、並行して教員にもほぼ同内容のアンケート調査を実施し、9人の教員より回収された。アンケート質問の⑤以降は、学生に対する質問内容の「あなたの……」という部分を「TCUの学生の……」と置き換え、教員自身の取り組みではなく、教員の側から見たTCUの学生の現状を調査する内容とした。論文の文字制限もあり、今回はそれを本格的な分析の対象とすることはできなかったが、本論文の締めくくりとして、最後にその結果の一部を記したい。

現在の日韓関係に関する教員自身の認識、またTCUのクラスや教育環境、また礼拝等が学生に与えるインパクトに関する質問に対する回答の割合は、学生の回答とほぼ同様であった。一方、質問⑧の、「異文化交流に対する積極性」を尋ねる質問では、TCUの学生の約6割が、「積極的」「やや積極的」という自己評価をしていたのに対し、教員の半数以上は、積極的に異文化交流に関わる学生の割合を、2割以下と評価していた。学生の自己評価に比べ、教員の評価が低い理由は、アンケートからは直接明らかになっていないが、教員から見えない場所、例えば寮生活、学内の委員会活動、またそれぞれの教会生活などで、学生は異文化交流の機会を持っており、そのような部分が回答に反映されていると思われる。それは、教員が感じている以上に、学生は異文化交流の機会を持っているということかもしれない。

14 萱間真美『質的研究実践ノート』医学書院、2007年、3、51頁

また質問⑨の、「より良い日韓関係のために、自分自身（あなた個人）にもできることがあると思いますか」という問いかけに対し、「とてもそう思う」「ややそう思う」の合計は45人で、全体の75%となった。同じ質問の「自分自身（あなた個人）」の部分を「TCU生」として教員に尋ねたところ、「とてもそう思う」「ややそう思う」という回答の合計が100%となった。質問⑧と質問⑨に見られる、学生と教員の見解の相違は、TCU教員の、学生に対する期待値の高さの現れであると理解することができる。そのようなTCU教員の存在は、「異文化理解」の学びを支える「教育環境」と「クラス内容」に対する学生の高評価にも反映されていると言えるだろう。今後は、より多くの学生が、より積極的に異文化と関わる機会を持ち、そしてそれらの経験をより良い学びに続ける努力が、学生、教員の双方に求められている。